



テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

あらた 荒田このみ(ニヌム)さん
＝「民族共生 象徴空間(ウボボイ)」勤務・アイヌ語担当

— お仕事は何を。
アイヌ語の体験学習です。
アイヌ語でビンゴゲームをしたり、「三びきの子ぶた」や「赤ずきんちゃん」などみんなが知っている童話をアイヌ語で話したりして、楽しみながらアイヌ語にふれてもらいます。

— ニヌムさんの家系は昔から札幌にいらしたとか。
はい。今、北海道大学がある場所に琴似コタンがあって。それから明治時代前半に旭川市に移り、私も5歳までは旭川にいました。
— 旭川ではどんな暮らしを。

ばあちゃん子で、いつも祖母のそばにいました。祖母は木ぼりをしていたので、家にも木ぼりや古い道具などがずらっとあって。歌の練習をしたり、儀式のための料理をするときにも、ついて行きました。それで、うちはアイヌなんだろうなと知っていました。
札幌に引っ越して、小学校4年のとき、社会科でアイヌにふれました。教科書には、いいふうを書いてなくて、

「きみ、これ知ってる？」の意味。な力やどした植物で、つるをニンカリにすること、その生命力をもらうことができると言っていたそうです。

お話にあるように、アイヌ民族には、子供が幼いうちに親同士が結婚を決めるいいなすけの習慣がありました。いいなすけ同士は、1組のニンカリを片方ずつ持つことがあったと言います。キツネが女の子に化けて女の子のニンカリをして見たのは、それがいいなすけの印だったのかも知れません。

好きな「言葉」子供と勉強

先生も見た目のちがいを話ただけでした。クラスに先生の言うような見た目の男子がいて、茶化されているのを見ました。アイヌがそんなふうに見られることにおどろいて、友達を家に呼ぶのがこわくなりました。
— アイヌ語を学んだきっかけは。

高校のときに釧路市阿寒町出身の子とても仲良くなりました。それから若いアイヌが集まる場ができて、そこに集まる人はみんな歌もおどりが長くて、すごかったです。でもアイヌ語は知らないという人が多くて。私も知らないけど、言葉が好きだったので、それなら私はアイヌ語を広めることを頑張りたいと思ったんです。

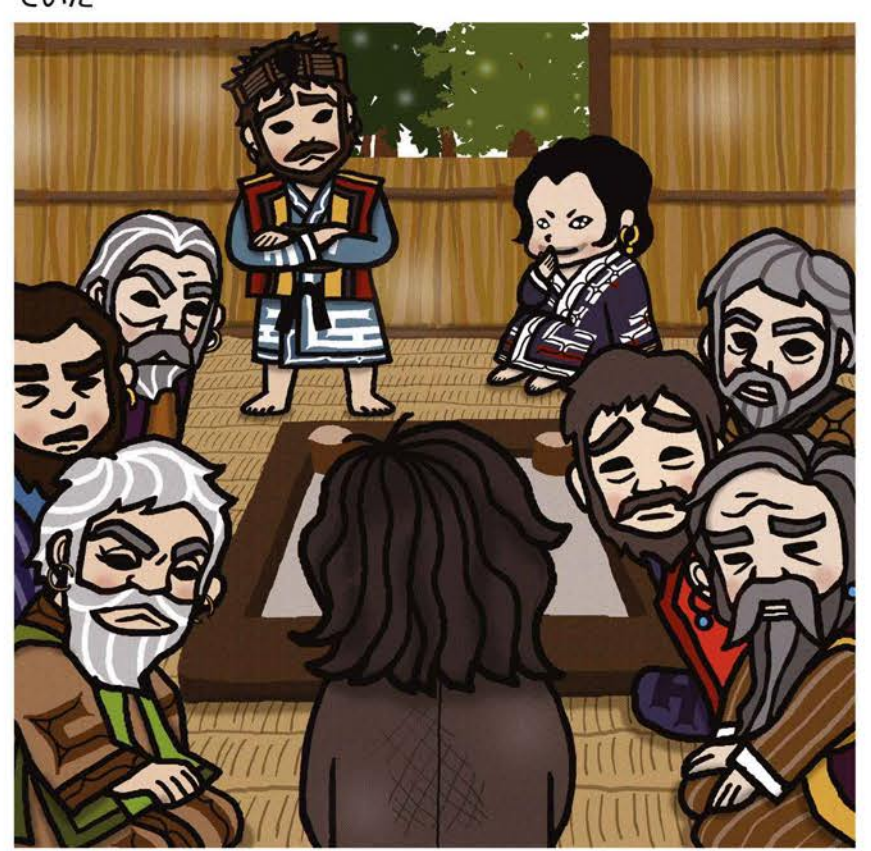
今は自分の子供たちとアイヌ語を勉強するのも楽しいですね。お風呂で1日一言葉覚えろとか。上の子は家庭学習のノートにびっしりアイヌ語を書くんです。子供たちがこのままのびのびとアイヌ語を使うようになるのが今の夢です。

ニンカリ

輪の形をした金属製のアクセサリー。交易で手に入る物で女性も男性も子供のうちからつけてましたが、明治政府は男性がニンカリをすることを禁止しました。

タンベエヒラムアイン?

家の中では、さっきの女が、ぬすんだ着物を着て花よめになりました。家の中には、さっきの女が、ぬすんだ着物を着て花よめになりました。



オタサム村はとても大きな村で、中央にひととき立派な家がありました。ここが目指す家らしいので、戸口のところにいると、中から小さな女の子が出てきました。そしてまた中にもどり、「みすぼらしいむすめが来ていますが、入れて良いですか」と中の人に聞いています。家の人が「身なりは関係ない。用事があって来た人なら案内しなさい」と言うのが聞こえました。小さな女の子は「みつももないむすめ、入りなさい」とぞんざいに案内しました。

女の子がおどると、そでから天小のクリが転がり出た



その女は「少しねなさいな」というので、言われるまま少しめをつぶりました。気がつくくと、さっきの女がいまません。それに大切な荷物もありません。そして女の子の耳には、桜の皮のニンカリが下がっていました。しかたなく、泣きながらそのままオタサム村に向かっことにしました。

むかし、モンサムという村に1人の女の子がいて、お母さんからとてもかわいがられていました。だんだん大きくなったある日、お母さんは「おまえがまだ赤ちゃんのころから、結婚の約束をしている人がオタサム村にいる。その人のおうへに行つて、水くみやすい事、たきぎとり、ぬいものなど、女の仕事をしつゝ一緒に暮らさない」と言いました。女の子はうれしくて、きれいな着物や身の回りの物をきれいなゴザに包んで背負い、お母さんに別れをつけて海にそってオタサム村に向かいました。途中で、がけのかげから1人の女が出てきました。みると、桜の皮をニンカリ(耳輪)の代わりに下げ、ここにこしながら「へへ行くんだい、少し休んでおいき」と話しかけてきました。その親しげな様子に女の子も気を許して「ありがとう、休んでいきます」と木の切り株に座りました。

結婚相手に会いにオタサム村へ向かう。途中で見知らぬ女に呼び止められ…



すると若者は「よし、私の結婚するむすめはクリおどりが得意だと聞いた」と言つて、私たちがおどりを比べをするように言いました。女の子はそれならばと、さっそくおどりを始めました。するとそのおどりのみことな。それに左右のそでから大きいクリや小さいクリがバラバラと落ちて転がるので、集まった人々はたいそうおどろきました。
次に悪い女の番になりましたが、困った顔をするばかりで、いくら急かしてもおどりません。人々があやしく思つて立たせても、ウロウロするだけで何もできません。みなでせめると、なんとキツネの姿になつて「モンサムの女より先回りして、オタサムの者と結婚しようとしたのに、くやし」とさげびました。若者や人々はおどろいて、燃えているたきぎを取り、キツネをなぐつて退治しました。
女の子は川に連れていかれ、キレイな水をそそいで清められ、それから結婚のお祝いをしました。それから仲良く暮らして子供も生まれて幸せになりました。
子孫の代になつて「悪いキツネの霊になやまされたことがありますが、災いをきりぬけ平穏に暮らしました。こういうこともあるので、男性も女性も結婚相手のところに向かうときは、1人で行つてはならないよ」と語り残したということです。

にせものに化かされたら…

昔は、夜中に見慣れない客が来ると、キツネが化けていないか確かめるために、それとなく干した筋子をつすめたといいます。人間だったら歯についた筋子をつまようじや手で取りますが、キツネは足(後足)の指でほじるので、すぐわかるというわけなんです。

このほかにもアイヌ民族やニヴフ民族の話では、キツネが悪さをしたり人を化かしたりする話がよくあります。日本の話でも、キツネは人を化かすとされるころがよく似ていますね。

クリおどりの試験

渡島管内長万部町の試験

(吉田 敏子より)

渡島管内長万部町に伝わってきたお話です。このようにに魔物が女の子になりまして、美しい男性と結婚しようとしたものの、おどりが正体を現す話。これは女の子の手からくしにされた団子や干し肉がおちます。なせ手から食べ物が出るのかは、はっきり語られていないのでわかりません。不思議な話ですね。